

「心の基地」はおかあさん

私がこの本に出会ったのは高校生の頃です。母の蔵書だったのですが、実際にじっくりと読んだのは、子どもが生まれてからです。普段の私は、毎日のように「早くしなさい。」と口やかましく言う、大らかとは正反対な母親ですが、息子達は、無条件に「母親」という存在を肯定してくれます。その素直な瞳に接すると、明日からはやさしい母親になろうと反省する日々を送っています。

我が家には二人の息子がおります。二人共、文理幼稚園からお世話になりましたが、先生方のきめ細やかなご指導により、頼りなかつた幼子が、みるみる自立の気持ちを持つようになりました。特に長男は、おそくに授かつた子どもということもあり、かなり過保護に育てたという自覚があるのですが、小学校に入り、「自分でやってみる。」と言うことが多く見られるようになり、お導き下さった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。今、長男は小学校の生活が楽しくてたまらない様子で、自分の世界が出来てきたことを感じます。こうして、少しずつ私の手をはなれていくのだな、と思うと少し寂しいですが、子どもが将来に向けて羽ばたいていく姿を見守るのも楽しみな気持ちでおります。これから息子達は楽しいことにも、努力が必要なことにも、たくさん局面に出会うことでしょう。自分で悩むことも大切ですが、困った時には私を思い出してくれるよう、息子達の「心の基地」でありたいです。そしていつか、二人の息子に、我が家に生まれてきてくれてありがとうと伝えたいです。最後になりましたが、日頃、ご指導下さっている先生方、そしてお友達の方々に、深く御礼申し上げます。

不思議の国へのいざないかはたまたま：

原稿用紙を前にどうしようと思案したところで高尚な文章は期待できず、部屋を見渡し目が合ったウサギについて書いて書いてみる。

いわゆる迷いウサギであり、我が家に引き取られて一年半になるうか。体色は灰色がかった白色で、目は紅い。ペランダでの放し飼いを始めたこともあり、だいぶスリムになったものの、店に並ぶ有名品種の愛らしい容姿に比較し、ふくよかな雄ウサギである。家族会議で決定したはずだが、定着した名前はない。うさぴョン、ピョン吉、ウサ、ウサギ……。まさしくイッパイアッテナ。先ほど娘がピョン太と呼んでいたのここではピョン太とする。ウサギを飼うのは初めてではないが、何せこのピョン太は懐かない。一年ほど経つてようやく寄つてくるようになったが、それでも手を差し伸べると逃げる。妻は撫でているときに噛まれた痕が未だに残っているという。現時点で誰も膝に乗せることに成功していないと思われる。

両親と同居している三世帯の我が家であるが、皆とピョン太との関わりはそれぞれであり、二年生の娘は朝起きると餌を与え、ケージからペランダに出し学校へ向かう。トイレ掃除をすることもある。一方、息子は気が向いたときに撫でているが、自主的に世話しているところを見たことがない。私は世話する人に懐くとの情報を信じ、ケージ掃除や餌やりをせつせと行っていたが、慣れるタイミングは皆同じだった。全く世話のし甲斐がない。

とはいえ、家族が寝静まった夜帰宅したときにペランダ越しに寄ってくる姿は癒される。今日もまた、食後の始末に向かう。

十四歳の母

育むものである「家族」を思う

娘は頑固だ。

普段は女の子っぽいところもあり可愛いのだが、一度スイッチが入るとややこしい。それも、こちらが何かしら譲歩すれば納得する類のものではなく、大概の対象は自分自身というから更にはやこしい。

人生初の剥離骨折を経験中の娘のピアノ練習である。本人は全くと言っていいほど痛くないにも拘わらず、運動してはいけないとお医者様に釘を刺されているので、大好きな体育の授業や、週四、五回行っていたテニスのレッスンは受けられない。そのフラストレーションが上手い具合にピアノに向いてこない。一週間も右手親指を固定していたのだから、十六分音符が弾けないのは当たり前だ。だが、娘は良しとしない。「弾けるはず。」そこはかともない自信が弾けない自分に容赦なく襲いかかる。自分自身だけでなく家族にも向かってくる。大人気ない私は全力で立ち向かう。親子関係がおかしくなりそうな瞬間だ。初めは静観していた兄も妹の悪態を論す。しかし、娘は一向に落ち着く気配が無い。その姿をも私は叱る。

だめだ。今日はもう帰って温かくて美味しい物を食べさせてやろう。ここに来て私も漸く気がつく。

そうだ。娘は怪我をした自分に腹を立てているんだ。テニスの合宿にも行けなかった。字も書きづらい。そんな菌痒さを私が受け止めてやれないでどうする。何年母親をやっているんだ。自分に奢りが無かったか。なかなか親にはなれないものである。

神話では、天岩戸が開き天照大神が現れた時、鶏が鳴き、世の中が明るくなったとされている。時告げ鳥と呼ばれ、時を正確に告げる鶏は先を読み、未来に羽ばたくシンボルとされている。

酉年を迎え、私は気分新たにペンを執っている。さて、今年はどうなるだろう。明るい年となるように、我が家では家庭における年中行事を毎年大切にしてきた。四季折々、季節の節目に日本古来からの伝統的な行事を楽しむ。それが、日常の生活空間に生氣と活気を与え、また潤いと豊かさを肌で感じて過ごすことにつながる。と日々教えられ、信じ、実感してきたからであろう。

この年末は、八才の長女も本格的にお節料理作りに参加した。学校で教わってきたお節料理の意味を確かめながら、一品ずつ重箱に詰めていく姿は、まるで小さなお母さんのように見えた。少し大人びた所作が嬉しくも可笑しく、何とも負うた子に教えられて浅瀬を渡る思いがこみ上げてくるのだった。おかげで今年も、和やかにお正月を迎えることができた。我が家には、長女の上に十歳年上の長男が居り、今春、長きにお世話になった文理の学び舎から巣立とうとしている。このほほえみが刊行される頃には何処に飛び立っているのか。一家で料理を囲むことの幸せ、また子供たちの成長が一入身に染みる新年の幕開けとなった。

「意志のあるところに、道は開ける。」

長男の言葉に心を捉えられた。今、まさに酉はその時を告げているのだろう。子供たちの毎日が、未来が、明るく素晴らしいものであるよう願ってやまない。

耐雪梅花麗

「雪に耐えて梅花麗し」。これは西郷隆盛が詠んだ漢詩の一節であり、今年プロ野球の広島東洋カープで現役引退した黒田博樹投手の座右の銘です。梅の花は、冬の雪や厳しい寒さを耐え忍ぶからこそ、初春に美しい花を咲かせ、かぐわしい香りを発する。苦難や試練を耐えて乗り越えれば、大きく見事な成長が待っているというたとえ。大成するには忍耐が不可欠だということ。これは黒田投手が信条とする「苦しまずして栄光なし」という考えに通ずるものです。

日本のみならずメジャーリーグでも活躍された黒田投手ですが、上宮高校時代はエースナンバーの一番をつけたことはなく、ただ走ってばかりの高校時代だったようです。そのような時に出会ったのがこの言葉だそうです。その後の野球人生で、あれだけ苦しくご自身が挫折とまで思っていた上宮高校での経験が、実は掛け替えのない財産だったのです。

私がこの言葉をはじめて読んだ時、なんて素晴らしい表現なのだろうと一瞬で好きな言葉になりました。実際にノートに何度も何度も書いて、何ページもこの言葉でいっぱいになりました。しかし、書けば書く程なんとも重く厳しい言葉なのであるうと思ひ、好きな言葉というより、忘れないで心に刻んでおきたい言葉に変わりました。私自身、残念ながらこの言葉を子供に贈れる器ではありません。小学生にこの漢詩を深く理解することはまだ難しいと思います。成長していく過程で繰り返し聞かせ、徐々に子供自身で感じてもらえるものがあればいいと思っています。

授業参観で感じたこと

昨年の夏、膨大な医学論文を学習した人工知能（AI）が、ある女性白血病患者の遺伝子型から特殊なタイプの白血病であることを診断し、治療に役立ったと報道された。自分が関わる医療分野の話題でもあり、かなり衝撃を受けた。AIによるロボット手術の成功も報告され、今後、医療人の知識、経験、技術の差や施設、地域による医療格差がなくなり、多くの方がその恩恵を受けられるものと予想される。最近では、将来AIやロボットに取って代わられる仕事話題になっているが、子ども達にはぶれずに自信を持って自分の希望に向かって進んでほしいと常々感じている。

文理小学校では、一年生から四季折々の俳句や短歌を学習する機会があり、自宅で娘が元気な声で詠んでくれる詩歌を楽しんでいる。つい日々の慌ただしさの中で忘れてしまいがちな季節感を味わっている。先日の授業参観では、「論語」の発表があった。娘のグループは、「子曰く学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし」と発表していた。これから多くのことを学び経験していく子ども達にも、また我々親世代にも心に響く教えである。他のグループが選んだ孔子の教えもそれぞれ含蓄があり聞きこたえがあった。論語や百人一首などを学ぶ機会を用意してくださる文理小学校に大変感謝している。このような教科以外の学びが、どのような進路を選択するにしてもAIに取ってかわられない人材の育成に役立っているものと信じて、子ども達を日々学校へ送り出している。

我が子の将来を思う

日常生活において様々な物が自動化されつつある。自動化と言っても今は人工知能AIや高性能センサー、ビッグデータの発達によりもはや機械による単純処理の領域を超え、機械・ロボットが複雑な判断処理を行えるようになってきた。ふとこれからの十年二十年先を想像してみると、希望や夢を感じるといよりは若干の不安や怖さを感じてしまうのは私だけだろうか。ゲーゲルのCEOは「二十年后、あなたが望もうが望ままいが現在の仕事の殆どがロボットによって代行される」と言った。また現存する職業の実に四十七パーセントがロボットに代行され消滅するという予測もある。では逆にロボットに代行されずに将来残るであろう職業は何だろうか？ それはロボットが不得意とする領域の仕事ということになる。ロボットやコンピュータは自力で新たに物を創造することが不得意と言われている。つまり創造性を武器に新たな物や技術を作り出すクリエイティブな職業が今後残っていくということだ。近い将来ロボットが至る所に溢れ人間の仕事を代行するようになる時、我が子はまだまだ現役では仕事をしている時期かもしれない。そう考えると我が子が将来就く職業は何なのか今は勿論判らないながらも親としてはよくよく我が子の進むべき道について注視し適宜軌道修正をしてやらねばなあと思うところである。そして今の子供達は塾に習い事と格別忙しい。これも時代の潮流なのだろうが将来必要不可欠な創造性は教科書の勉強や習い事だけでは培えない。やはりもっと色々な体験をさせてあげるべきだし、一生懸命遊べる時間の確保も必要と改めて感じる次第である。

時の流れ

大晦日に一年を振り返り、この原稿をしたためている。毎年思うことだが、今年も一年経つのが早かった。小学生だった頃と比べると、瞬間に時が過ぎていく印象だ。単純に考えれば、それだけやるが増え、日々仕事に追われていると言える。しかし一方で、苦労はしても想定範囲内のことが多く、日々の記憶がそれほど残っていないだけかもしれない。一方、小学生の頃は、勉強だけでなく、遊びや様々なことが自分では想像できない新しいことが多かったはずだ。その分、多くのことが記憶に残って、時の流れが長く感じたのかもしれない。

人間らしく生きるために、記憶と忘却は両輪として働く。記憶できなくて悩まされることも多いが、忘却も忘れることが出来ないPTSDのような病気になるくらい実は大切だ。我々の脳は日々の膨大な情報を、記憶と忘却のせめぎ合いで整理して、人格や能力を形成しているのだ。そう考えると、色々なことを経験し、その中から良いことを記憶して、嫌なことを忘れることで、健康に成長できると思える。

愚息には、目の前に知らないことがゴロゴロ転がっている小学生のうち、幅広く喜怒哀楽に富んだ色々な経験をして、忘却のフィルターで濾過した上質な記憶を積み上げて欲しいと思っている。人生を振り返るには若すぎる彼も、いつの日か小学生の頃を懐かしく思う時期がやってくる。その時に、小学生の頃は、時の流れを長い濃密な時間だったと感じられるように、親としてより多くのチャンスを与えるようにしたいと思う。

五年生の娘へ、五年生だった母より

息子よ

三学期に入つてすぐの身体計測を終えた長女が、もうすぐママの背を越える、だって目線が同じ高さだもと、自慢げに話しかけてきた。いやいや、まだ十五センチほどの身長差はあるのだが、なるほど目線の高さは一年前よりもぐっと近づいてきたように思う。

私は小学五年生の夏休みに重症の頭部外傷を負い、二度の開頭手術を受けた。術後一年間は体育、運動は禁止。自転車に乗っていた際の受傷であったため、父はその後、私に自転車に乗ることさえも許さなかった。私にとって「小学五年生の夏」は、人生で一位二位を競うほどのターニングポイントであった。

顔も性格も私に一番似ている長女は、「小学五年生の夏」を何事もなくさらりと通過した。なんだか、私の呪縛も解かれたような気がした。友人家族に誘われた神山でのサイクリングでは、実は一番緊張していたのは私だったけれど、娘も一緒に二十数キロを完走できた。うちの娘もなかなかやるもんだ。

運動が苦手な私が、子供達にいいところを見せようと浅はかな動機でマラソンなどを始めてみたが、一緒に走れるかと思いきや、その身体能力はとうの昔に抜き去られていた。同じ趣味を一緒に楽しめる時間など、案外ほんの一瞬なのかも知れぬ。

いつまでも幼いと思っていた娘も、気付けば同じ目線で肩を並べ、そしてあつという間に大人へと駆け上がっていくのだろう。娘の成長が頼もしくもあり、でもやっぱり心配も尽きないが、残り一年となった小学校生活を楽しんでもらいたいと願う。

息子を見ていてつくづく思うことがある。似ているのである。見た目ではない。仕事や考え方である。性格も含めてである。

私は、散らかすことが得意である。家内にそのことで一日一度、叱責されることにはもう慣れた。無いと寂しいくらいである。我が息子、これにおいては見事なほど、私のコピーである。彼の参観授業に行った時、机の中を垣間見て確信した。よくあの机の中からの確に教科書が捜し出せるものだ。感動に近いものがあつた。さすが我が息子である。才能と言っても良いだろう。

また、私は食いしん坊である。家内も同様であるが、彼女と私は食いしん坊の質が違う。彼女には「別腹」が存在する。それは、想像を絶する時がある。もう驚愕である。我が息子、私の食いしん坊に近い。外食をした時に、自分の許容量を越える注文をついしてしまうことである。しかし、残すのは嫌なので、二人とも完食を目指して体調を崩す。愚かなのだ、実に。

さらに、私は調子に乗ることにかけては人後に落ちない。これは血筋である。間違いない。私の父はピーマンが良いと言つては食べ過ぎて口内炎に悩まされ、竹踏みが良いと言つては踏みすぎから寝つきが悪くなるといったことを重ねてきた人である。私も昔から調子に乗つて体調を崩すタイプであつた。粗忽者一家である。我が息子、まさに絵に描いた様なお調子者である。楽しそうな空気を感ぜると赤の他人のグループでもスイスイ交わり、スパーの試食コーナーを回りすぎて店に警戒されてしまつたりするのだ。息子よ、お前は実に私に似ているのだ。愛してやるぞ。

視野を広げる

中央教育審議会が昨年十二月、二〇二〇年度から順次実施される新学習指導要領の基本方針を文部科学省に答申した。その柱の一つとして高校の公民に必須科目として「公共」が新設される。

選挙権年齢の十八歳以上への引き下げを受け、政治、経済の仕組みや動向を学び、社会の発展に主体的に取り組む市民を育てるのが目的だ。充実が急がれる「主権者教育」を教育課程に位置づけたものといえる。答申ではさらに、主権者教育を小中学校の義務教育段階から行うように提言。その進め方の一つとして新聞活用を推奨している。

授業前の朝の時間に新聞のコラムを書き写したり、記事の感想を書く宿題を出したりする学校が増えていく。息子も宿題のために時々、新聞をめくるようになった。日口首脳会談でロシアのプーチン大統領が来日していたときのこと。「お父さん、北方領土ってずっと日口間で問題になつたことな」と話しかけてきた。時事問題を話題にすることなどなかっただけに驚かされた。とはいえ、息子が主権者になる日もそう遠い話ではない。身の回りの日常から社会に視野を広げることは大いに結構である。

新聞は、学校では習わない「社会のいま」を幅広く多角的な視点で取り上げ、分かりやすく解説している。新聞やテレビのニュースを見て社会の出来事を知り、自分なりに考え、判断し、解決策を探る。そうした思考や行動の積み重ねが生きる力を育んでいくのだらう。新聞を活用し、子どもたちが社会に関心を持つきっかけを与えていただいている先生方に感謝したい。

卒業を前に

小学校で過ごした六年間を今思い返してみると、本当にあつたという間であつた。気がつけば息子は最高学年となり、慣れ親しんだ学び舎を卒業する日が刻一刻と近づいてきている。

卒業を前に、息子が小学校に入學した頃のことを思い出した。当時、真新しいランドセルを背に姉と手を繋ぎ、笑顔で楽しそうに登校していた。その様子を見ながら毎日、胸を撫で下ろしていた。忙しい日々の中、子供達が笑顔で登校する様子は、送り出す親として安心と感謝そして、その日一日を頑張るためのパワーをもらっていた。それは、息子が六年生になった今も変わらない。

小学校生活で子供達は、大人へと成長していく上でかけがえない様々な経験をし、人としての土台となることを多く学ばせてもらった。それは、親である私達も同じで、一人の子の親として成長するためにはならない経験の数々であつたと今さらながら実感している。右も左も分からない子育てではあるが、親子が共に考えたり悩んだりしながらこれからも、少しずつ少しずつ一緒に成長していければと心から願っている。

四月から息子は中学生になる。今後息子も私達と一緒に一喜一憂していかなければならない覚悟と、人として大きく成長していつてほしいという期待を胸に、これからは親として共に人生という道を歩んでいきたいと思っている。

小学校で過ごした六年間という年月は、私達親子にとって本当にかげがえのない経験と出会いの六年間であつたと、心から感謝の気持ちで一杯である。